

それでは、こうした人間の絆や心の居場所を修復するために、「心理的な援助関係」というのはどんなことが求められるだろうかと考えてみますと、実は何か非常に格別な人工的なものというよりは、質の良い心理的な援助関係ほど日常生活の中にある良質な営みを抽出し、理論的・技法的に洗練されたものと言えます。心理療法にみられる良質な関係も営みも、実は私達はいつの間にか普通の豊かな人間関係の中でしているのではないかと思います。これは決して特別な事ではなくて、だからこそ私は質のいい児童養護施設や児童病院の営みがこよなく貴重であるように思います。

心理援助というのは、援助者がある得意な方法論に則って相手を合わせるのではなくて、相手のニーズに合わせて柔軟に統合的に技法を考えていくことが必要だろうというふうに考えます。良質の心理的援助というのは、技法が浮き上がらないでクライアントの必要性に即するように努力しながら、プロセスに沿って創意工夫をさりげなくこなしていくこと、私はいかにも〇〇療法を受けているというよりは、「こんな普通のことをしていて素人みたいでいいんだろうか、いやこれは結局自分の力が徐々に出来て自分が変わって自分が解決しているんだ」と当人が思われるようなアプローチこそ理想ではないかと兼ねがね思っておりまして、そこには個別的で多面的なアプローチを求められております。大事なことは本人の自尊心をいかに大切にするか、この人の全体状況、将来こんなふうに自立して生きていくかということに今やっていることがどういう意味があるかということを考える姿勢であろうかと思います。そして、成長

途上にある子ども達に出会う私達に求められるのは、自分自身のことを括弧に入れて相手を対象化して考えるという姿勢だけではなく、私は今どんな人間か、どういう過程を経て様々な人や事の援助の中にあるのか、そして何が未解決の問題かということについて正直に考えていることが大事であります。それと同時に、自分の半身を目の前の子どもと同じ年齢に戻って感じたり見えるように、いつも自分を勉強して訓練している状態を保つ努力が要るだろうと思います。しかし、全身が子どもになってしまっただけでは困るので、自分の半身では主導権をいい意味で保持できるようにバランス感覚をきちんと持っていることが必要であろうかというふうに思います。

心理的な援助をする場合、心理療法の原則を抽出してそれを自分の器、所属機関に応じて緩め、限界を超えるようなら他機関に連絡することが重要であります。そして一番重要なことは当事者に比べれば第三者の苦労は些細であるということを中心にとめておくこと、本人にとって援助者が夢の中の存在のように忘れられるぐらいに身近に関わる人が増えるのが理想であることと思います。



事例は省略致しましたが、虐待をされて育ち、問題扱いされてきた子どもに対し、村瀬先生が出会いの瞬間から子どものこころの流れを捉えたことにより、こころの居場所の「種」を得たこと、それをきっかけとして保護者や周囲の人たちも変化し、子どもが居場所を獲得していくもので、まさに今回のシンポジウムのテーマにぴったりのお話でした。